

ヨシュア記に続く、旧約聖書の歴史書である士師記には、「士師」或いは「救助者」と呼ばれている人物が12名登場する。そのうちの6名はその働きについて詳しい記述があり、それらの人を「大士師」と呼び、ただ名前や統治年数しか記されていない人を「小士師」と呼ぶ。今朝は「大士師エフタ」について学びたい。

I. 勇士であったエフタ

エフタについては「ギレアドの人エフタは勇士であった」(11:1)と言うことばで始まっている。彼は父が遊女に産ませた子で、正妻の子たちから散々いじめられ、家から追い出され、ヨルダン川東部の辺境の「トブの地に住んだ」(3節)。

そのエフタの許には「ならず者」が集まり、彼はそのリーダーとなった。その様な時、エフタの出身地ギレアデに、東方のアモン人が戦争を仕掛けて来た(4節)。その時、エフタを追い出したギレアデの長老たちが、エフタに戦いの指揮官となってほしいと頼みに来た。

そこで勇士エフタは以前の恨みを忘れて、アモン人との戦いの指揮官を引き受けた。

II. 軽率な誓い

エフタはアモン人との戦いの前に、彼らに対して何故戦いを仕掛けるのかを問いただした。すると、それはヨルダン川東側の地にイスラエルのルベン部族とガド部族とマナセの半部族が領地を持っていることへの不満であることが分かった。これには交渉の余地はなく、戦いは避けられない状況となった。

その時、エフタは神に対して一つの誓いをした。それは、この戦いに勝利して家に帰った時、最初に自分を出迎えてくれた者を「焼き尽くす献げ物といたします」という誓いであった(31節)。しかし、これは実に軽率な誓いであった。

何故なら、エフタを最初に出迎えた者とは、彼の一人娘であったからである。これがエフタを悲しみの父にしたのであった。但し、これは文字通り「焼き尽くす献げ物」(レビ記1章)としたと即断してはならない。これはカナン原住民の悪習慣で(列王記下3:27)、神はこれを厳しく禁じているからである(レビ記18:2、列王記下11:7)。

すると、これはエフタの娘は一生独身として、神に仕えたことを意味すると考えられる。

III. エフライム人のいちゃもん

アンモン人との戦いに勝利したものの、一人娘を神に献身させた傷心のエフタに更に心の痛みを与えたのが、エフライム部族の人たちのいちゃもんであった。それはアンモン人との戦いに呼びかけてくれなかったと言う、身勝手な理由であった。それが原因で内戦が始まった。エフライム人たちは口ほどでもなく、ヨルダン川を渡って逃亡しようとした。

そこでエフライム人であるかどうかを判断するために、「シボレット」(川の流れ)と発音させた、しかし、彼らは「シボレット」(重荷)としか発音出来なかった。即ち、彼らは「sh」を「s」としか発音できない人たちであった。何事でもいちゃもんを付ける人は「シボレット」(重荷)になるが、私たちは「シボレット」(川の流れ)の様に、爽やかな者でありたい。